

研究室紹介 田隈研究室

千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 田隈 広紀

1. 大学・P2M との出会い

研究室を紹介する前段として、私と大学・P2M との出会いを書かせて頂きます。

高校 3 年の時に取り寄せた大学の資料の中に、現在所属している大学・学科のパンフレットがあり、漠然と「色々教えてもらえてオトクそうだな」と考え志願しました（当時の先生方申し訳ありません）。このような低い志でしたので受験勉強に身が入らず、大学進学をほぼ諦めかけました。しかしこれもまた漠然と読んだ漫画の主人公が大学の講義で「人間には好奇心、知る喜びがある。（中略）なぜ学び続けるのでしょうか？それが人間の使命だからです。*」と語るシーンがあり、「大学」という機関の意義を理解し、憧れを抱きました。それから自分でいうのもなんですが短期集中で猛勉強し、何とか B 日程で合格しました。

晴れて入学した大学では、当学会でもご活躍の先生方から非常に解り易く、かつ拡がり・・・というより夢がある実学的なご講義を頂戴し、「プロジェクトマネジメント」を学ぶことに期待と誇りを持たせて頂きました。新しいモノ・コトを、早く・安く・よい形で仕上げていく合理的な思考とツールを習得する過程で、高校時代に憧れた「知る喜び」を贅沢に味わったと思います。さらに 3 年生の時にオープンキャンパスの学科説明員を担当した際、あまり興味を持っていないと思われる高校生に必死でプロジェクトマネジメントの面白さを伝えたところ、その高校生が推薦入試で入学を決め、別の日に友人を連れて再来してくれました。この経験と、卒論の指導教授が素晴らしかったことが、私が大学教員を目指したきっかけです。

一方で P2M については、在学中に第一版のガイドブックが創刊され、「プログラム」

という存在を初めて知る機会になりました。しかし当時は正直なところ、プログラムとしてモノ・コトづくりに取り組む利点が理解できなかったです。

大学教員を目指すうえで、自分にはまずプロジェクトの実経験が必要と考え、大学卒業後 IT サービス企業に入社し、システムの運用保守・設計開発を 4 年半ほど担当しました。そこでは予想通り、プロジェクトマネジメントの考え方とツールが役立ちました。しかしその後、新事業・技術の開発を担当することとなり、そこでそれらは上手くワークしないことがわかりました。例えばある新規市場向けの製品シリーズを開発する際、未決定事項が多すぎて WBS やガントチャートが引けない、プロトタイプ的设计書やプログラムコードの品質を計るうにも基準が定まらない、いやそもそも試作品って品質保証が必要なのか・・・という具合です。そこで学部時代に出会った P2M を思い出し、その習得と学位の取得を目指して、社会人学生として東京農工大学大学院に入学させて頂きました。そこでは P2M の基本思想と、ロジックモデル、バランスト・スコアカード、SWOT 分析、ブースト・ゲート法[®]等のこれまで馴染みのなかったマネジメント手法を知ることができ、さらに志を同じくする社会人学生の仲間と出会うことができました。2012 年 9 月に博士(工学)を授かり、2013 年 4 月より本学の教員として研究室を構えることになりました。この間にも様々な出来事がありましたが、ここでは割愛します。

2. 研究室で行っている教育と研究

以上のような経緯で大学教員になったため、学生にはまず何よりも「知る喜び」をたくさん味わってもらいたいと思っています。その実践方針は、高度な論文を渡すことでも、丁寧に教えてあげることでもなく、私が本学と農工大で出会ったお二人の指導

* 勝鹿北星・浦沢直樹「MASTER キートン」第 3 巻より引用

教授からして頂いたように、「学ぶ魅力を伝え」「チャンスを与える」ことを理想にしています(が、両方とも本当に難しい・・・)。さらに研究へ取り組む過程で、少しでもよいので「知識を創る喜び」も感じてほしいと思っています。特に学部生にはやや高い要求かもしれませんが、教員としては「失敗するかもしれないけどやってみよう」という背中を押すような関わり方をしたいと思っています。以上を理想形として、具体的な施策としては下記を行っています。

1) 知識を応用するフレームを構築する

講義とゼミでは、そこで習得してほしい知識の中から基盤的な事項を厳選して解説し、あとは演習とグループワークの中で、学生が自らの手で知識を補完し、実用化する方式としています。この実践には、まず科目の到達目標を定め、知識の習得・関連付け・応用に至るまでの行動特性を分析し、それらに対して適切な「関わり方」を検討する必要があります。この作業はかなり大変ですが、今年度になりようやく狙い通りワークしてきたことを実感しています。



図1 筆者の講義の様子

2) 研究の意義と型を理解してもらう

研究室配属の直後の3年生前期のゼミでは、すでに公開されている研究論文を対象に、問題抽出と課題設定・研究提案の考案・有効性の確認・結果の考察の一連のプロセスを追体験する、通称「プレ研究」を行っています。この狙いは、研究を通して新しい知識を創造する意義と、それに適した「型」があることに気付いてもらうためです。また3)と重複しますが、なるべく学外で研究成果を発表する機会を持つように働きかけ、これまでに9名の学生が当学会の研究発表大会で発表する機会を頂きました。



図2 学生の研究発表会後の様子

3) 研究室の外で活動してもらう

マネジメント分野における「学びの場」も「解くべき問題」も、ほとんどは研究室の外にあると考えています。よって4年生前期までに必ず研究領域に対するフィールドスタディを行い、現場で起こっている問題をよく理解してから研究提案を考案するよう指導しています。またビジネスモデルコンテストや学会発表等の「他流試合」に参加するよう促し、知識を学ぶ・創るきっかけ作りを行っています。



図3 畑で実地調査する学生

3. 目指す研究室の将来像

以上のような理想・方針・施策で研究室を運営していますが、工夫と改善の余地は沢山あると感じており、また私自身も学ぶべきことが多いです。現在JSTの「PMの育成・活躍推進プログラム」に研修生として参加していますが、そこでも「まず社会で起こっている問題を徹底的に調べる時間が必要だ」とご指導頂いています。これからは皆様からのご指導と学生からのフィードバックを基に軌道修正しつつ、貪欲に学び挑戦し、将来は「プログラムマネジメントなら田隈研」さらに、「あの研究室にいたおかげで人生が拓けた」と言ってもらえるような場を築き上げていきたいです。